

## 平成 21 年度第 1 回府中市美術館運営協議会結果報告書

- 1 日 時 平成 21 年 6 月 21 日(日) 午後 1 時 30 分～ 3 時 30 分
- 2 場 所 府中市美術館会議室
- 3 出席者 委員(順不同・敬称略)  
中林、小野澤、蔵、田中、宝木、那須、藤原、上岡、深津、宮本委員、  
(鈴木、松浦委員欠席)  
事務局 大野文化スポーツ部長、井出館長、石井副館長、志賀学芸係長、  
武居教育普及担当主査、関主任、

### 4 内 容

- (1) 府中市美術館運営協議会会長挨拶
- (2) 府中市美術館館長挨拶
- (3) 資料確認
- (4) 議題の審議

### 5 議 題

- (1) 地域における府中市美術館の運営のあり方について  
資料 1～3 について事務局から説明の後、質疑応答がなされる。

#### [主な審議内容]

(上岡委員) 府中市美術館の設計者は誰か？また、美術館は府中市の中において、どのような位置づけであるか、伺いたい。

事務局 日本設計です。府中市美術館は、府中市の公共財産です。

(上岡委員) たとえば、本日広報に載っているイラストのキャラクター「ぼれたん」は、向きが変わっていたり、デザインが変化しているが、著作権の問題などはどうなっているのか。

事務局 「ぼれたん」については、いろいろな所作やポーズをとって来館者の興味を引かせるものであり、缶バッジなどを作成している。一つのデザインとして固定しているものではなく、あくまでも著作権が美術館に帰属するデザインである。

(宮本委員) 企画展について、全国には様々な美術館があると思うが、府中市美術館の企画の骨子がよくわからない。誰がどんなふうに、企画展などのラインナップを決めてきたのか、お尋ねしたい。

事務局 平成 20 年度の流れは青年・学生層をねらい、現代系の展覧会を一気にストーリー化して取り上げた。さらに、創作版画にしぼって「ゆかいな木版画」展、時期的に桜並木の下で近世絵画をと「山水に遊ぶ」展となるべく身近な作品を取り上げた。

(田中委員) 企画展については 5 年前から構想を練り始め、3 年くらい前から実質的なスケジュールの調整に入る等長期的な取り組みになると思われる。最近の企画展などを観ると、江戸末期から明治にかけて学芸員が専門的に研究しているもので、たいへんおもしろくなってきている。また、巡回展などは他館との折衝などがむずかしいものと思われる。

事務局 20 年度は 6 つの展覧会を開催したが、江戸後期から現代へ独自の企画と、他館の連携を要するものをつくり込みながら企画した。

(宮本委員) 市民が望む企画展や展覧会を叶えてあげたい。

(中林会長) 美術館設立当初からの委員もいるが、市民も含めてガイドラインを決めて、基本的活動を行なってきたと思う。

(宮本委員) 現状の枠組みにあてはめるだけではなく、わかりやすく、親しみのもてるものを選んでほしい。

(中林会長) 会議の後半は各委員からの意見、提言をいただきたい。

まず、歳出に対する歳入の割合に目安のようなものはあるか。

事務局 経営努力として、10%を目標として掲げているが、20年度は例年よりは低い数値となっている。

(中林会長) 入館者数の目標はあるか。

事務局 第5次府中市総合計画後期基本計画の中では、平成25年度20万人を目標としており、ここ数年は18万人台で推移している。

(田中委員) 展覧会収入が減少したのはどの企画か。

事務局 展覧会の入場者数と図録等の売上は連動しており、韓国現代美術展、パリ・ニューヨーク展が予定の収入よりも低迷した。

(田中委員) 韓国展は内容的に難しかった。

(蔵委員) 生徒の声は正直で、難しい、きついという声もあった。

(中林会長) パリ・ニューヨーク展や韓国展のようなテーマ展は、一般に対するアピールとしては難しい傾向にある。努力目標については何か求められるのか。

事務局 経営努力の結果の一つとして見られる。

(中林会長) 地域における府中市美術館のあり方について、各委員の意見を伺いたい。今後の運営協議会のスケジュールとしては、第1回目を平成20年10月に開催し、2回目を本日、3回目を平成21年秋に予定しており、答申の原案を作成していきたいと考えている。

(宮本委員) 美術館の数は全国的に増えてきていると思うが、府中市美術館としての企画の骨子、アイデア、テーマの決め方はどのように決めているのか、市民が望むものかなえてあげることができないのか。全国、関東、東京にどういった美術館があるのかよくわからないが、収入減は他館との関係上かもしれない。一生懸命やっていることは理解できるが作戦が必要である。

(中林会長) 一つの大きな展覧会があると、そこに集中して、来館数は飛び抜けて多くなる。反対に地道で目立たないが、よい企画もたくさんある。どのような視点から、どのような企画を選んでいくのかが、重要なことであり、委員の側からヒントを出せばよいと思う。

(藤原委員) 地域に密着した美術館とはどのようなものか。また、生活と美術とは、美術と結びついた暮らしであると思うが、府中市美術館のイメージがつかめない。現在の企画展は戸惑う企画展で、生活と美術になかなか結び付きにくい。たとえば、ごみの問題で言えば、ごみなのか、アートなのか、エコなのか、捉え方によって大きな違いがある。

(中林会長) 企画自体よりも、関連企画を通して結びつけていく方向が望ましいのではないか。最初からそれぞれの生活在りきで企画していくような美術展は難しいと思われる。

(宝木委員) 来年、開館10周年を迎えるが、4月から新しい館長が着任された。昨年の年間スケジュールを振り返ると、韓国展、パリ・ニューヨーク展が敗因ではないか。最近の傾向として、展覧会を個人名でアピールするのが今の時代であり、アピールする現代的なタイトルを付けて、もしくは付けられる企画を選び、10年目、11年目につなげていくことが必要と思われる。10年経つと美術品収集の予算も削られるようになり、10年目以降は様々な面で制約が出てくる。今まで守ってきた古いものから、枠を飛び越えた新しい企画、活動へ出て行く時期と言える。前館長が築いたアカデミックな活動を、新館長は柔軟に発展させていくことが必要と思う。

(中林会長) 市立美術館のテーマとしては、「生活と美術」はよいのではないか。気軽に入っていける間口を作っていく、さらに周知することが大切、タイトルしだいで入場者は

増える。

(藤原委員) タイトルにつけ方は、どう心をつかむか、見てくださる方の感動をどう呼ぶかである。マーケティングをして、全ての展覧会に市民を巻き込む手立て、企画を考える。市民グループによる仕組み作りが必要と思う。

(上岡委員) レベルの高い人が共感するだけではなく、一般市民に興味を持たせるようなタイトル、キャッチフレーズを付けた方がよい。宣伝の仕方一つで大きく変化する。

(田中委員) 展覧会を作り上げる努力は認められる。入館者がいかに入るかまでは、スタッフの数や予算面から難しい。市民で分担できるものはサポートして、作り上げていく企画を取り入れていくようにしたらどうか。

(上岡委員) 入館者を増やすために、館内のディスプレイなどを工夫してみてもどうか。

(深津委員) テレビでいう視聴率と美術館のそれとは違うと思う。アートは楽しいものであり、見た人が感動して、刺激されて、私も何か作りたいと思うものである。私が知っているカフェの中のギャラリーは、敷居が高くなくて、誰もが来られる場所である。「自分もできるんだ」という気持ちがクリエイターとして発展していく。府中市美術館として、一貫したテーマを作り上げていくことが必要と思う。

(小野澤委員) NPOとして常設展看士業務委託、ボランティアスタッフの育成に携わっている。展覧会ごとにポスターやチラシの配布などを行っているが、まだまだ知られていない。しかしながら、美術館に対して、皆さんが期待を持っているのは感じられる。それはティーンズスタジオに参加してくる子どもたちの表情を見ても、感じる。市民に親しまれる美術館、愛される美術館であるためにはどうしたらよいか、考えることが大事である。

(上岡委員) 一つの提案として、ロビーのエスカレーターの壁面、美術館入口の正面に小学生や中学生の絵を貼って、まわりに寄せ書き風に画用紙を貼って見たらどうか。これも、ロビーの活用方法と思う。

(藤原委員) 市民も参加できるような空間作りを考える参考となる。

(小野澤委員) ロビーの活用方法としては、以前にも七夕かざりやクリスマスツリーなどを飾ったことがある。

事務局 それらについては、各イベントの中で考えていきたいと思う。

(蔵委員) 20年度は、美術館にご協力いただき、東京都中学校美術教育研究大会「北多摩大会」の会場を府中市美術館と市立浅間中学校で、北多摩中学校美術展を市民ギャラリーで共に開催し、一週間で2000人近い集客となった。数字で全てを判断するのは好まないが、人数ではなく、美術館に来てよかったと思う子はまた来る、そうやってつながっていくものと思う。「生活と美術」とは、地域の人がいつでも通える美術館でもある。

(中林会長) 適正人数なのか、目標人数なのか、コマーシャル活動とは違うと言える。

(那須委員) 小学校の場合、「企画を見て、行って見て、よかったよ」からまわりに広がる。口コミで広がることが多いので、身近にある題材を取り上げてほしい。実際には、子どもの展覧会などで市民ギャラリーを見に行っても企画展までは行かない。学芸員と一般の人のギャップがかなりある。

事務局 展覧会の経費は他館との協賛かどうかで高額になる場合がある。また、外国から作品を借りてくるものは高い経費がかかり、市民の方々の要望と美術館の意向に若干差がある。

(藤原委員) 親しまれる、愛される美術館とは具体的にどのようにしたらできるか。

(中林会長) 組織づくりをしていく必要がある。様々なアイデアがどのように反映されるか、具体化できる道筋を作る必要がある。

(小野澤委員) 美術について、美術館についての市民の実態を知りたい。

(宮本委員) 難しい企画、イメージを膨らませないとわからないような企画が多い。説

明（解説）が非常に難しい。やさしく目に入り、頭の中に入る企画がよい。「山水展」のクイズ形式の説明は興味をそそる解説でよかった。

（深津委員） 印象に残る展示、思い出に残る展示とは、五感に訴える、勇気をもらうことだと思う。物の見せ方、展示の仕方で印象が異なる。

（中林会長） 様々な意見が出ました。やらなければいけないと思っているが、体制が整っていないのが実情である。第2の力が生かせる場所があればよいのだが。次回の運営協議会までに考えをまとめていただきたいので、極力、美術館に足を向けていただきたい。

（田中委員） 「山水展」はたいへん好評だったのに、年度がまたがっているためか、今回の資料には数字としてあまり出ていないが、図録もたいへん素晴らしかった。桜の時期に、珍しい作家の作品、インパクトのあるポスター、NHKの日曜美術館にも取り上げられたりして、興味深かった展覧会であった。

（館長） 忌憚のないご意見を頂戴して、ありがとうございます。来年の開館10周年を前にして、たいへんな時期に問題続出というのが素直な実感です。当美術館は学術的にも、企画展や美術普及の点においても、最も進んだ美術館であると自負しています。さらに、弱点をしらみつぶしにして、おごることなく、市民のための美術館として運営にあたりますので、ご協力よろしくお願ひします。

（中林会長） 次回の日程としては10月もしくは11月頃を予定しているの、よろしくお願ひします。

その他

なし